

歐陽脩の易學思想の形成——十翼論を中心に

藤田 衛

はじめに

『周易』とは、周王朝に成立したとされる古代中國の占いの書である。しかし、單なる占いの書ではなく、儒教の根幹をなす經典、五經の一つに數えられた。「易經」とも呼ばれるのはそのためである。『易』が儒教經典の一角を擔つたのは、孔子が晩年に『易』を好み、『易』の解説書に相當する十翼を作つたとする傳承による。十翼の孔子作説は、古くは『史記』に記録され、金科玉條のごとく信じられてきた。しかし、現在の視點から見れば、たとい孔子の語録が含まれていたとしても、十翼そのものが孔子の作とは到底考えられない。儒教尊崇の世にあつて、文獻批判を通して、十翼孔子作説を眞つ向から否定した者がいた。それが本論で取り上げる歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）である。

歐陽脩の『易』に關する著作は多くない。『易童子問』三卷（『歐陽文忠公集』卷七十六）、『易或問三首』（『居士集』卷十八・經旨）、『明用』（同上）、『易或問』（『居士外集』卷十・經旨）、『傳易圖序』（『居士外集』卷十五・序二）ですべてである。これら著作を通して、歐陽脩の易學

を究明した先驅的な論者が、戸田豐三郎「歐陽脩の易學」である^①。上記の資料をもとに、十翼のすべてが聖人の作ではないとした議論に焦點を當て、歐陽脩の易學を解き明かす。

中國では、朱伯崑と曹建林の論考が挙げられる。前者は、「六十四卦、皆、人事を言ふ」「物は極まりて必ず反る」「繫辭等の傳は聖人の作に非ず」の項目を立て、『易童子問』を中心に論じる。後者は、疑古、解經方法、王弼易學との關係性、影響と地位の側面から論じる。

以上の先行研究で必ず言及されるのが、十翼のすべてが聖人の作ではないとする主張である。その十翼論の論旨は、既述した先行研究において十分に論じ盡くされており、新たに付け加えることはない。ここで問題にしたいのは、歐陽脩は如何にしてその着想に至つたのか、その十翼論が歐陽脩の『易』解釋にどのような影響を與えているのかである。この方面については、まだ十全に議論がなされていない。

そこで本稿では、歐陽脩の十翼に對する見解を確認した上で、如何にして十翼のすべてが聖人の作というわけではないという着想を持つに至つたのかを考察し、その十翼論が彼の易學思想の根幹となつてい

一、歐陽脩の十翼論

まず、歐陽脩が十翼に對し、どのような見識を持っていたのかを確認する。『易童子問』に次のような問答がある。

童子の質問・繫辭傳は聖人の作ではないのですか。

答え…どうして繫辭傳だけであろうか。文言・說卦傳より以下も、みな聖人の作ではなく、さまざまな説が混淆しており、一人の言ではない。『易童子問』卷三「童子問曰、繫辭非聖人之作乎。曰、何獨繫辭焉、文言・說卦而下、皆非聖人之作、而衆說淆亂、亦非一人之言也。」

十翼は、象傳上・下、象傳上・下、繫辭傳上・下、文言傳、說卦傳、序卦傳、雜卦傳の七種類、十部分で構成される。「文言傳・說卦傳より以下」とは、文言傳・說卦傳以下の序卦傳・雜卦傳も含めて、聖人の作ではないということである。では、それ以上の象傳・象傳はどうか。

孔子は周末に出で、文王の志が後世に現れず、『易』がひたすら筮占の用とされることを懼れて、はじめて象傳・象傳を作り、卦義を發明した。（『易或問三首』「孔子出於周末、懼文王之志不見於後世、而易專爲筮占用也、乃作象・象、發明卦義。」）

歐陽脩は、象傳と象傳は孔子の作だと考えていた。『易童子問』では象傳と象傳の解釋を主とするのも、ここに理由があつた。十翼すべてが聖人（孔子）の作ではない、と歐陽脩は主張したわけではないことに注意が必要である。

それでは歐陽脩は、どうして象傳・象傳は孔子の作、繫辭傳以下は聖人の作ではないと判斷したのか。その差はどこから來ているのか。

そのキーワードとなるのが、「はんえんそうぎ繁衍叢脞」（繁雜で細々としていること）である。

わたしが、繫辭傳以下が聖人の作ではないと知つたのは、その言が繁衍叢脞であり齟齬をきたしているからである。（『易童子問』卷三「余之所以知繫辭而下非聖人之作者、以其言繁衍叢脞而乖戾也。」）

また、

その説が一人に出たと言うならば、繁衍叢脞な言となつてしまう。そして、ついには聖人の作と考えるならば、さらに大きな誤りである。孔子の文章は、『易』『春秋』だけで、その言はよりいっそう簡潔で、その義もよりいっそう深い。わたしは、聖人の作がこのような繁衍叢脞であつた例を知らない。（『易或問三首』「謂其說出於一人、則是繁衍叢脞之言也。其遂以爲聖人之作、則又大繆矣。孔子之文章、易・春秋是已、其言愈簡、其義愈深。吾不知聖人之作、繁衍叢脞之如此也。」）

とも言う。歐陽脩は、聖人の作はかならず簡潔であるという信念を持っていた。^⑥彼は、「經は簡潔であつて率直、傳は目新しく珍奇である。（『春秋論上』「經簡而直、傳新而奇。」）と言う。「孔子の文章は、『易』『春秋』だけ」と言つたのは、『易』の象傳・象傳と『春秋』の經文の簡潔さゆえなのである。それに反する「繁衍叢脞」な繫辭傳以下は、聖人の作とみなすわけにはいかなかった。

歐陽脩は、繫辭傳以下が「繁衍叢脞」となつた理由は、一人の説でなく様々な言説の寄せ集めだつたからだと考えた。『易或問三首』に「^⑦どうして聖人の作ではないと知つたのか」の問答がある。一つに、文言傳や繫辭傳に「子曰」とあることを挙げる。通常、「子曰」は「孔子は言う」と解される。しかし、歐陽脩はそうは考えなかった。

「講師の言」だとみた。『論語』に「子曰」と記されるのは、孔子の弟子たちが追記した書であり、孔子の言と弟子の言を區別するためであった。もし文言傳が孔子の作ならば、みづから「子曰」と書くはずがないと指摘する。現在から見ても説得的である。もう一點に、文言傳の「元者善之長、亨者嘉之會、利者義之和、貞者事之幹」の文句を擧げる。これとほぼ同文が、『春秋左氏傳』襄公九年に穆姜の言として引かれる。襄公九年（前五六四）は、孔子が生まれる前である。もし左丘明が文言傳を孔子の作だと認識していたならば、穆姜の説に付會して後世を惑わすことはしないはずであり、左丘明は文言傳を孔子の作だとは考えてはいなかった證だと考えた。歐陽脩はむしろ穆姜の言だとみなした。^⑨

十翼の説は誰から起こったのか分からないとしつつ、十翼が形成される過程について、次のように述べている。

昔の『易』を學ぶ者は、まじえ取つて講論の助けとし、その説は一家から出たものではなかった。そのことから、あるところは同じくあるところは異なり、あるところは正しくあるところは誤り、その取捨選擇は精緻ではなく、經を損ねて世を惑わせるに至つてしまった。（『易童子問』卷三「昔之學易者、雜取以資其講說、而說非一家、是以或同或異、或是或非、其擇而不精、至使害經而惑世也。」）

その具體例を『易童子問』で示している。簡潔にまとめると、一つ目は、乾の爻辭に對して象傳と文言傳で何度も異なつた解釋を行っている點。二つ目は、繫辭傳において『易』の「易簡」の義を何度も繰り返し説いている點。三つ目は、六爻は三才（天地人）の道を備えていることが繫辭傳・說卦傳で繰り返し説かれている點。四つ目は、繫辭傳に「辭を繫く」理由が複数擧げられている點。次に矛盾している

點として、文言傳に乾の「元亨利貞」の四德を説くが、また一方で四德としない箇所があること。もう一點に、繫辭傳に八卦は人が作つたものではなく、天が降したものとする記述がある一方で、八卦は人が作つたもので河圖は關つていないとする記述があり、それに加えて、說卦傳には卦は善から出たとする説も見えることを擧げる。解釋の重複そして齟齬は、繫辭傳以下の傳が一人の説に出たものではないことに起因すると考えた。

しかし、歐陽脩は聖人の作ではない「繫衍叢脞」な繫辭以下の傳を一切放棄してもよいとまでは言わなかった。繫辭傳は講師の傳だといえ、その源は孔子に出で易師に相傳されたものであり、聖人の言とそうではないものが混在していると考えていた。^⑩ 繫辭傳には先儒の餘論がなお含まれており、學ぶことに益はあるとする。問題は、聖人の作とみなして無條件に信じていることであつた。「もし聖人の作とみなして、取捨選擇しようとせずことごとく信じるならば、經を損ね世を惑わせるものが多い。（『易童子問』卷三「使以爲聖人之作、不敢有所擇而盡信之、則害經惑世者多矣。」）と言うようにである。

例えば、繫辭傳の「大衍」の章について、「大衍は、筮占の事です。その筮占の説には、非とするところはないのですか」という問いに對し、「その法は正しいが、その言は間違ひである」と答える。^⑪ つまり、「大衍」の章に記される筮法は上古の聖人の法だと信じてよいが、その解説は間違ひだということである。

要するに、歐陽脩の十翼論とは、象傳と象傳は孔子の作と認めつつ、繫辭傳をはじめとする文言傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳は聖人（孔子）の作ではないとするものであつた。ただし、繫辭傳以下は聖人の作ではないとしたとはいえ、すべて切り捨てることはせず、繫辭傳に

は聖人の言と聖人ではない言が含まれるとし、一定の價值は認めていた。

この十翼のすべてが聖人の作というわけではないという主張は、當時において極めて畫期的であつた。しかし、あまりに革新的すぎて評判のよいものではなかつた。⁽¹⁴⁾ 歐陽脩の友人であつた韓琦でさえ、内心ではそれは誤りだと考えていたが、歐陽脩とは終身まで『易』について語りあうことはなかつたという。⁽¹⁵⁾

二、十翼論は如何にして生まれたか

では、歐陽脩はどのようにして十翼のすべてが聖人の作というわけではないという着想を持つに至つたのか。朱伯崑は「當時の易學における論争に即して見れば、繫辭傳が孔子の著作もしくは聖人の書であることを否認した目的には、圖書學派の『易』解釋の學風に反對し、易學を神祕家することに反對することに在」⁽¹⁶⁾ ったと指摘する。確かにそのような意圖も垣間見えるが、そのためだけに十翼の孔子作説を否定したわけではなかつただろう。もつと原初的な經驗からであつた。それが讀書體驗である。

歐陽脩は、四歳で父を亡くし、家は貧しく、書を讀むたびに誦んじ、自學自習に勵んだ。⁽¹⁷⁾ 特別な師もいなかった。⁽¹⁸⁾ 歐陽脩が「世に師がいなければ、學ぶ者は經を師とすべきである」と言つたのは、自身の經驗から發せられたものであつた。歐陽脩が繫辭傳以下は聖人の作ではないという考えに辿り着いたのも、讀書を通してであつた。十翼を疑うに至つた經緯を次のように述懐している。

孟子は、「ことごとく『書』を信じるならば、『書』がないほうがましである」と言つた。孟子は學を好んだ者である、どうして

『書』を輕んじようか。思うに、みずから間近で聖人の作を見ることができず、傳承はその眞實を失ひ、正すことできないことを嘆き悲しんで言つたのであろう。しかし、どうして『書』がなくてよいことがあるうか。わたしは〔『禮記』の〕經解を讀み、『易』の「差は毫厘の若かれども、謬りは千里を以てす」の説を引くのに至り、また今の『周易』に「何をか謂う。子曰く」とあり、繫辭傳に至れば、また「聖人は卦を設けて、辭を焉に繫く」と言う箇所を讀み、その眞實を突き詰めようとしたが何も得られなかつた。そうした後に孟子の嘆きを知り、そこで感激するものがあつた。(傳易圖序「孟子曰、盡信書、不如無書。夫孟子好學者、豈獨忽於書哉。蓋其自傷不得親見聖人之作、而傳者失其眞、莫可考正而云也。然豈獨無書之如此、余讀經解、至其引易曰差若毫厘、謬以千里之說、又讀今周易有何謂。子曰者、至其繫辭則又曰聖人設卦・繫辭焉、欲考其眞而莫可得、然後知孟子之嘆、蓋有激云爾。」)⁽¹⁹⁾

歐陽脩は、『禮記』經解に現行本にはない『易』の文を引くことや、文言傳に「何をか謂う。子曰く」とあること、繫辭傳に「聖人は卦を設け、辭を焉に繫く」といつた「辭を繫く」理由が複數見られることに對して疑問を懷いたが、明確な回答は得られなかつた。その折、孟子の「ことごとく『書』を信じるならば、『書』がないほうがましである」という言葉に出會ひ、『易』そのものを疑うに至つたのである。⁽²⁰⁾ ところで、十翼の孔子作説を疑つたのは歐陽脩がはじめてというわけではなかつた。元の胡一桂は言う、

十翼は、先儒はみな孔子の作だと言うが、ただ范諤昌と王昭素だけは、象傳・象傳・爻辭・小象傳・文言傳はいずれも周公の作だと言つた。何の證據があつたのかは分からない。(『周易啓蒙翼傳』)

下篇・周公作象爻辭文言之疑「十翼、先儒皆謂夫子作、獨范諤昌・王昭素、乃謂象・象・爻辭・小象・文言並周公作、不知何證。」

王昭素（九〇四—九八二）は、若くして學を好み仕えることはなく、人を集めて教授して自給自足の生活を送っていた。年七十七にして推舉され、太祖に『易』を進講する。太祖はそれを褒め稱え、國子博士に任命する。その著書に『易論』二十三篇があったが、現在は散佚している。『崇文總目』によれば、「昭素の『易論』は、諸家の善を取り、おのれの見解をまじえて、折衷した（昭素易論、取諸家之善、參以其言、折衷之）」本であった。また『中興館書目』には「昭素は、王・韓の『易』注および孔・馬の疏の義を、いまだ盡くしていないと考え、この論を著した。（昭素以王・韓注易及孔・馬疏、義或未盡、乃著此論。）」とある。

朱震『漢上周易叢說』には、『正義補闕』は、夫子は文王の彖辭（卦辭）にもとづいたので彖傳があつたと言う。王昭素と胡且も同様に言う。（『正義補闕』曰、夫子因文王象而有彖。王昭素・胡且亦云。）とある。『正義補闕』は、『周易正義』の缺を補った書で、著者は明らかでなく、宋の世に出た書だとされる。胡且（九五五—一〇三四）は、太平興國三年（九七八）の狀元で、その著書に『周易演聖通論』があつた。その書は、經疏や王昭素の論を多く引き確證としていたとされる。

『漢上周易叢說』の記述によれば、王昭素は象辭（卦辭）を文王の作、彖傳を孔子の作としていたように讀み取れる。しかし、王昭素が象傳・象傳・爻辭・小象傳・文言傳は周公の作としたとする、胡一桂の記述と食い違う。むしろこの説を唱えていたのが、范諤昌であつた。

范諤昌は、その事績は詳らかでなく、天禧年間（一〇一七—一〇二

二）に毗陵（今の江蘇省常州市）の從事であつたとされる。また河圖・洛書の圖を傳えた一人として數えられる。その著作に『易證墜簡』があり、これも傳存していないが、朱震『漢上周易叢說』でどのような議論を展開していたのか窺える。

范諤昌は『易證墜簡』を著して、諸卦の象傳・象傳・爻辭・小象傳・乾坤の文言傳は、いずれも周公の作で、文言傳より以下が孔子の敘述であると言う。（范諤昌著易證墜簡曰、諸卦象・象・爻辭・小象・乾坤文言、並周公作、自文言以下孔子述也。）

また范諤昌は、乾の卦辭「元亨利貞」が彖傳で説き、さらに文言傳でも解釋する重複を疑い、孔子の言ではないと言つた。穆姜の言をその明證としたという。この論證は、歐陽脩と軌を一にする。ただ歐陽脩とは異なり、范諤昌はその作者を穆姜以前の周公に求めた。

以上のように、十翼の孔子作説を疑う言説は歐陽脩より以前に存在していた。しかしながら、王昭素と范諤昌は別説を立てたとはいえず、文王や周公といった聖人に歸屬させることには變わりない。歐陽脩はさらに一步踏み込んだと言える。

十翼すべてが聖人の作というわけではないと主張する「易或問三首」「易或問」が書かれたのが、景祐四年（一〇三七）のことであつた。では歐陽脩は、それ以前にこれらの書物を讀み影響を受けていたのか。范諤昌の『易證墜簡』はどうか分らないが、王昭素の『易論』は確實に讀んでいた。なぜならば、王昭素『易論』は『崇文總目』に收録されているからである。歐陽脩は、景祐元年（一〇三四）から景祐三年（一〇三六）までの間、『崇文總目』の編纂に參與していた。すでに十翼の孔子作説に異論を唱える者がいたことは、歐陽脩が十翼のすべてが聖人の作というわけではないと主張することを心理的に容易に

したことは十二分に考えうる。⁽³¹⁾

また、聖人の作かどうか識別する際、歐陽脩は簡潔であることを一つの基準としていた。それは歐陽脩が尹洙から學んだ古文の特徴でもあった。⁽³²⁾ 歐陽脩は、科擧に及第した後、天聖九年（一〇三二）、洛陽に赴任し、そこで尹洙に出會い、彼に従い古文を學んだ。尹洙の古文の特徴は、「簡にして法有るものであった。この「簡にして法有り」は、歐陽脩は聖人の作の特徴だと考えており、六經では孔子が作った『春秋』だけに當てはまり、その他の經は孔子が自作した文章ではないので、法があっても簡ではないのだと言う。⁽³³⁾ 聖人の作は簡潔であるという信念は、古文の習得が機縁になったと考えられる。とすれば、歐陽脩の十翼論は、古文習得以前、すなわち天聖九年より前にはいまだ確立してなかったことになる。

歐陽脩は、景祐四年に「易或問三首」「易或問」をはじめ、「春秋論」「春秋或問」「泰誓論」といった經書に關する論考を多數執筆している。⁽³⁴⁾ この時は夷陵に貶謫された不遇の時代であった。東英壽氏は、「かかる夷陵に於ける諸研究は、貶謫に先だつ景祐元年から二年間、彼が館閣校勘の任を務め『崇文總目』の編纂に攜つたことによつて、學識を身につけ、蓄積したことを基盤としていた」と指摘する。⁽³⁵⁾ 宮中に所藏されていた萬卷の書物を思う存分に讀む機會を得られたことは、思想を形成する上で大きな役割を果たしたことは疑いない。

つまり、簡潔を旨とする古文、經書をも疑う孟子の批判精神、通説にとらわれない先人に啓發を受け辿り着いたのが、十翼のすべてが聖人の作というわけではないという確信だったのではなからうか。

三、歐陽脩の『易』解釋における十翼論の影響

繫辭傳以下は聖人の作ではないとする認識は、歐陽脩の『易』の形成史觀を獨特なものにした。

八卦を作った者、八卦を重ねて六十四卦にした者、卦辭・爻辭を作った者、それぞれ諸説あつた。孔穎達は『周易正義』にてその諸説を擧げ反證し、八卦とそれを重ねて六十四卦にした者は伏羲、卦辭は文王、爻辭は周公の作だと結論づけた。以降、この見解が通説となつた。しかし、歐陽脩はこれを取らない。

六十四卦は、古から用いられていた。夏商の世での、筮占の説は、おおよそ『書』に見える。文王が紂の亂世に遭つて、天下を憂える心があり、萬世を慮る志があつたが、發するところがなかった。卦爻は奇偶の數に起り、陰陽が變化し、交錯して文様を成し、君子・小人・進退・動靜・剛柔の象があつて、治亂・盛衰・得失・吉凶の理がここに備わると言われていたことから、そこで借用して言を託して、名づけて『易』と言つた。（易或問三首「六十四卦、自古用焉。夏商之世、筮占之說、略見于書。文王遭紂之亂、有憂天下之心、有慮萬世之志、而無所發、以謂卦爻起於奇耦之數、陰陽變易、交錯而成文、有君子・小人・進退・動靜・剛柔之象、而治亂・盛衰・得失・吉凶之理具焉、因假取以寓其言、而名之曰易。」）

歐陽脩は、「六十四卦は、古から用いられていた」と言うだけで、伏羲が作ったとは言わない。⁽³⁷⁾ なぜなら、八卦と六十四卦を作った者が伏羲だとする説は、繫辭傳と緯書の一篇である『易緯』に依るところが大きかったからである。緯書は經書を補完する書で、孔子の作だとされる。しかし、實際は全くの假託である。⁽³⁸⁾ 歐陽脩は、九經の『正義』から讖緯の記述を取り除くよう上奏するなど、緯書を全く信じていなかった。繫辭傳に見える伏羲八卦創作説話は、歐陽脩が矛盾點を

指摘する箇所であつた。繫辭傳や緯書を聖人の作だと考えていなかった歐陽脩にとつて、伏羲が八卦と六十四卦を作つたとする説には何ら根據はなかつたのである。

歐陽脩は經に立脚することを重視する。

經に書いていることは、わたしが信じていることである。經が言わな
いことは、わたしが知らないことである。(春秋論上「經之所書、
予所信也。經所不言、予不知也。」)

その姿勢が如實にあらわれた問答が、『易童子問』に見える。

童子の質問…「萃の象傳に」「萃は、聚なり」とあり、その卦辭に
は「王廟を有つに假る」と言います。「渙は、散なり」とするの
に、その卦辭にも「王廟を有つに假る」と言うのは、どうして
ですか。

答え…渙に散の意味があると言つたのは誰だ。『易』にそのよう
な辭はない。

童子…では、あえて渙の義について質問します。

答え…わたしは決して臆見を述べない。渙の卦辭には「大川を涉
るに利あり」と言い、その象傳には「木に乗るに功有るなり」、
その象傳にはまた「風水の上を行くは、渙」と言う。そして人
が言うには、氷が解け流れて行き渡ることを渙と言う。そうする
と、渙は、流行通達することを言い、乖離分散の義と異なる。

『易童子問』卷二「童子問曰、萃、聚也、其辭曰王假有廟。渙、散也、
其辭又曰王假有廟、何謂也。曰、謂渙爲散者誰歟。易無其辭也。童子曰、
然則敢問渙之義。曰、吾其敢爲臆說乎。渙之卦辭曰利涉大川、其象曰乘
木有功也、其象亦曰風行水上、渙。而人之語者、冰釋汗浹皆曰渙。然則
渙者、流行通達之謂也、與夫乖離分散之義異矣。」

「萃は、聚なり」「渙は、散なり」と意義が眞逆なのに、その卦辭に
同文があるのはなぜか、という疑問に對して、「渙は、散なり」とい
う意義は『易』には存在しない、「渙」は流行通達の義なのだと回答
する。

「渙は、散なり」とする説は、『周易正義』に由來する。渙の卦辭の
『正義』に「雜卦傳に『渙は、離なり』とある。これもまた渙は離散
の呼び名とする。(『雜卦曰渙、離也、此又渙是離散之號也。』)」と云う。

『正義』が「渙」の意味を「離散」であるとしたのは、雜卦傳に典據
があつた。だが、歐陽脩は雜卦傳を聖人の作とみなしていなかつた。

だからこそ、『易』にそのような辭はない」と否定したのである。

歐陽脩は聖人ではない言を介在させることを嫌い、勉めて經に依據
して解釋しようと試みていたことが、上の問答からはつきりと見て取
れる。また『易童子問』には、童子の質問に對して、「吾不知也」の
一言で済ませる箇所がある。それは經に解釋するための據りどころが
なかつたからである。

歐陽脩は決して無理に解釋しようとはしない。「六十四卦は、古か
ら用いられていた」と、誰が作つたのか明言せずに曖昧に留めたのも、
聖人の作である經に論據がなかつたからに他ならない。

卦辭と爻辭の作者は、先に挙げた説の他に、卦辭・爻辭ともに文王
とする説もあつた。文王作説は、繫辭傳に「『易』の興るや、其れ中
古に於いてか。『易』を作る者、其れ憂患有るか。(『易之興也、其於中
古乎、作易者、其有憂患乎。』)」や「『易』の興るや、其れ殷の末世、周
の盛徳に當たるや。文王と紂との事に當たるや。(『易之興也、其當殷之
末世、周之盛徳邪、當文王與紂之事邪。』)」とあることにもとづく。「其れ
憂患有るか」とは、紂王によって文王が羑里に囚われ、艱難の中で

『易』を敷衍した故事を指すとされる。卦辭は文王、爻辭は周公の作とする説は、爻辭に文王死後でしか書き得ない記述があるとするところから生まれた説である。^⑩

歐陽脩は文王作説に左袒した。それは、上に擧げた繫辭傳の文章は聖人の言だと認めたことによる。^⑪ 上述したように、歐陽脩は繫辭傳には聖人の言と聖人ではない言が含まれていると考えていた。

どうして文王は卦辭・爻辭を作り、孔子は彖傳・象傳を作ったのか、歐陽脩の見解は非常に興味深い。

文王が紂の亂世に遭って、天下を憂える心があり、萬世を慮る志があつたが、發するところがなかつた。卦爻は奇偶の數に起こり、陰陽が變化し、交錯して文様を成し、君子・小人・進退・動靜・剛柔の象があつて、治亂・盛衰・得失・吉凶の理がここに備わると言われていたことから、そこで借用して言を託して、それを名づけて『易』と言つた。後世に至って、占筮に用いられるようになった。孔子は周末に出で、文王の志が後世に現れず、『易』がひたすら筮占の用とされることを懼れて、はじめて彖傳・象傳を作り、卦義を發明し、必ず聖人・君子・王后と稱してその事に當て、常に四方の萬國、天地萬物の大なることで言辭を作つた。明らかに卜筮に止まるものではない。それゆえ本意を推して世の誤りを正し、そうした後に文王の志はおおいに明確となつて、『易』ははじめて六經に列せられたのである。『易』が卜筮の書に成り下がつたのは、今の世だけのことではない。孔子がいなければ、文王の志は没して現れなかつた。(『易童子問』卷三「文王遭紂之亂、有憂天下之心、有慮萬世之志、而無所發、以謂卦爻起於奇耦之數、陰陽變易、交錯而成文、有君子・小人・進退・動靜・剛柔之象、而治亂・盛

衰・得失・吉凶之理具焉、因假取以寓其言、而名之曰易。至其後世、用以占筮。孔子出於周末、懼文王之志不見於後世、而易專爲筮占用也、乃作彖・象、發明卦義、必稱聖人・君子・王后、以當其事、而常以四方萬國、天地萬物之大以爲言。蓋明非止於卜筮也、所以推原本意而矯世失、然後文王之志大明、而易始列乎六經矣。易之漏于卜筮、非止今世也、微孔子、則文王之志沒而不見矣。」

文王は、『易』の卦爻にはこの世のあらゆる道理が含まれていると考え、そこでその義を發明する辭を作つた。それが後世では専ら占筮に用いられるようになった。孔子は、文王の志が理解されていないことを惜しみ、彖傳・象傳を作つた。そうして文王の志が明確となり、『易』は卜筮の書ではなく、この世の道理を正す教訓の書となり、六經に列せられたのだ、と歐陽脩は考えた。『易』を、占筮の書ではなく、人事の書だと捉えることは、歐陽脩の易學思想の特徴の一つである。^⑫ だからこそ、筮占を主とした漢易よりも義理を重視した王弼を評價した。

ああ、文王に孔子がいなければ、『易』は卜筮の書に成り下がっていた。『易』に王弼がいなければ、異端の説におちぶれていた。孔子にもとづいて文王が心を砕いたことを求め、王弼にもとづいて孔子の意を求め、わたしが言つたことにもとづいて王弼の得失を求めるのがよろしい。(易或問三首「嗚呼、文王無孔子、易其淪於卜筮乎。易無王弼、其淪於異端之說乎。因孔子而求文王之用心、因弼而求孔子之意、因弼言而求弼之得失、可也。」)

歐陽脩が説卦傳や雜卦傳を筮人の占書だと言つて聖人の作ではないと否定したのは、孔子が傳を作つた理由は占筮のためではなかつたと考えたことによる。

歐陽脩は、『易』の經と傳が渾然一體となつた形に批判的であつたことも特筆される。當時の通行本は、現在と同様に『周易正義』において正統な注釋として採用された王弼注本であつた。その本は、經傳混淆となつた形であつた。例えば、乾卦では、最初に卦辭が置かれ、次に爻辭、そして象傳・象傳・乾の文言傳と続く。坤卦では、卦辭の次に象傳・大象傳が置かれ、各爻辭の後にそれぞれの小象傳が分配される。その後には坤の文言傳が置かれる。その他の卦は、坤卦と同じ構成となつてゐる。そして、六十四卦の後に繫辭傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳の順で付される。歐陽脩は、この經傳混淆の形は本來の形態ではないと考えていた。

費直の『易』は、授かることなく、章句も残さず、ただ象・文言等の十篇で上・下經を解釋した。およそ象・象・文言等を卦中にまじえ入れた者は、みな費氏を祖とする。田何・焦延壽の學は、漢末に廢れ、費氏ひとり興り、代々傳えられ、鄭玄に至つた。そして王弼の注には、鄭玄の説を用いたところもあり、王弼は鄭玄本にもとづいて注を作つた。今の世に通行するものは、ただ王弼の『易』だけで、その源は費氏に出る。孔子の古經は亡んでしまつたのである。(傳易圖序「費直之易、亦無所授、又無章句、惟以象・象・文言等十篇解上・下經。凡以象・象・文言等參入卦中者、皆祖之費氏。田・焦之學、廢於漢末、費氏獨興、遞傳至鄭康成。而王弼所注、或用康成之說、是弼即鄭本而爲注。今行世者、惟有王弼易、其源出於費氏也。孔子之古經亡矣。」)

費直は、前漢末の人で、著作は残さず、とりわけ十翼をもつて『易』の上下經を解釋した人物とされる。歐陽脩は、その費直が初めて經と傳を合し、鄭玄がそれを受け継ぎ、王弼が鄭玄本にもとづいて

注を付けた。そして、經傳混淆の王弼本だけが残ることになり、經傳別行の孔子の古經は滅んでしまつた、と考えた。この費直が初めて經と傳を合したとする説は、歐陽脩の創見である。彼が書いた『崇文總目』の易類序にも、ほぼ同じ主張がなされている。⁽⁴⁵⁾

確かに、少なくとも前漢までは『易』の經と傳は分置されていた。⁽⁴⁶⁾だが、歐陽脩より前では、『易』の形態についてほとんど問題視されることはなかった。三國魏の高貴郷公髦が博士の淳于俊に、鄭玄注では經文と象傳・象傳を合してゐるのはどうしてか、と下問したことが記録されるぐらいである。歐陽脩が經傳混淆の形に否定的であつたのは、昔はそうだつたから元に戻そうとする單なる懷古主義によるものではなかつた。その裏には、十翼のすべてが聖人の作というわけではないから、という理由があつたはずである。聖人の作である書とそうではない書を峻別する歐陽脩にとつて、それが混じり合つてゐる形は承服しがたかつたのである。

以上のように、歐陽脩の易學思想は、十翼のすべてが聖人の作というわけではないとする十翼論が前提となつて形成されてゐた。言い換えれば、十翼論を土臺としてその上に築き上げられたのが、歐陽脩の易學なのである。

おわりに

概説書では、歐陽脩は、十翼は聖人あるいは孔子の作ではないと主張したと書かれることがある。しかし厳密に言えば、正しくない。歐陽脩が主張したのは、「十翼皆、非聖人之作」ではなく、「十翼非皆聖人之作」なのである。歐陽脩は、十翼のうち、象傳・象傳は孔子の作だと考えていた。それ以下の繫辭傳・文言傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳

が、聖人（孔子）の作ではないと主張したのである。

聖人の言と聖人ではない言を分かちキーワードが、「繁衍叢脞（繁雜で細々としていること）」であった。歐陽脩は、聖人の作はかならず簡潔で率直であるという信念を持っていた。文言傳や繫辭傳に象徴される、「子曰」の記述や、解釋の重複と齟齬、そうした「繁衍叢脞」から聖人の作ではないと判断するに至ったのである。ただ繫辭以下の傳は聖人の作ではないとしたとはいえ、そのすべてを否定することはしなかった。繫辭傳は講師の傳であるが、その源は孔子に出て、聖人の言と聖人ではない言が含まれると考えていた。

歐陽脩が十翼のすべてが聖人の作というわけではないという考えに辿り着いたのは、讀書體驗からであった。『易』の缺文や齟齬に疑問を懷いたのが、讀書においてであった。その疑念に煩悶する中で、孟子の「ことごとく『書』を信じるならば、『書』がないほうがましである」という經書自體を疑う批判精神に出會い、『易』自體を疑うように至ったのである。加えて、『崇文總目』の編纂官として宮中に藏せられていた萬卷の書物を讀む機會に恵まれたことも大きな役割を果たした。「易或問三首」や「易或問」だけでなくその他の經書に關する多數の論考が、『崇文總目』の編纂官から夷陵に貶謫されて一年足らずのうちに書かれたことは、『崇文總目』の編纂に參與したことが、歐陽脩にとって思想を確立する上で如何に重要であったかを示している。歐陽脩は、『崇文總目』の編纂官時代において、十翼の孔子作説に對し別説を立てる先人の著作を讀み示唆を受けながら、十翼論を確立したと考えられる。

十翼のすべてが聖人の作というわけではないという認識は、歐陽脩の易學思想の核心であった。歐陽脩は、聖人の言と聖人ではない言を

峻別し、聖人の作である經に依據して論を組み立てようとする。『易童子問』では、孔子の作とする象傳と象傳は論據とし、その他の聖人の作ではない傳の影響を排除しようと試みるのもそのためであった。そして、繫辭傳や緯書を根據とする伏羲の八卦六十四卦創作説を取ることはせず、『易』の經と傳は分けて置くべきだという主張にも繋がった。歐陽脩の易學思想は、十翼のすべてが聖人の作というわけではないとする十翼論が大前提となつて形成されていたのである。

歐陽脩の易學思想が宋代易學の展開に與えた影響は決して小さいものではなかった。費直が初めて『易』の經と傳を合したとする説は晁説之に受け繼がれ、現今の經傳混淆の形を古來の經傳別行の形に戻そうとする古易復興運動に影響を與えた。朱熹が『周易本義』において「十翼はすべて夫子の作つたものであるが、『子曰』の字を自著したはずはなく、おそらくは後人の加えたものであるう。（『周易本義』卷七「十翼皆夫子所作、不應自著子曰字、疑後人所加也。」）^⑩と云うのは、「子曰」を孔子みずから言うはずがないと疑い「講師の言」だとみなした、歐陽脩への反論なのである。朱熹は、歐陽脩の『易』解釋に對して批判的ではあるものの、歐陽脩の「用六」「用九」の解釋に關しては正しいとし、『周易本義』に取り入れている。

歐陽脩の易學思想は受容・批判されながら、次世代に受け繼がれていた。これまで歐陽脩の易學について、十翼のすべてが聖人の作というわけではないと主張したことばかりに注目され、宋代易學の中で果たした役割についてはそこまで注意が向けられてこなかったように思われる。歐陽脩の宋代易學での位置づけについては、今後さらに取り組むべき課題である。そのためには、本論で論じることができなかった、歐陽脩の『易』の經文解釋を分析することで、彼の『易』解釋の

特徴を明確にし、後の世の『易』解釋と比較する必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) 『史記』孔子世家「孔子晚而喜易、序彖・繫・象・說卦・文言」。
- (2) 『周易正義』卷第一・第六論夫子十翼「其彖・象等十翼之辭、以爲孔子所作、先儒更无異論」。
- (3) 『歐陽文忠公集』は、四部叢刊本を使用した。
- (4) 戸田豐三郎『歐陽脩の易學』（『東方學』第二十五輯、一九六三年、後『易經注釋史綱』、風間書房、一九六八年、所收）。
- (5) 朱伯崑著 伊東倫厚監譯 近藤浩之編『易學哲學史』第二卷（朋友書店、二〇〇九年）、曾建林『歐陽修經學思想研究』（浙江大學出版社、二〇一四年）。
- (6) 「簡易」「簡直」が歐陽脩の經學の特徴であつたことは、劉子健『歐陽脩的治學與從政（補正再版）』（新文豐出版公司、一九八四年）上編「（一）歐陽脩の經學」、宇佐美文理『歐陽脩の學問と藝術論』（『中國思想史研究』第九號、一九八七年）、土田健次郎『道學の形成』（創文社、二〇〇二年）第一章第二節四「自然と簡易」、注（5）曾前掲書第六章第一節「歐陽脩經學思想的特點」を参照のこと。
- (7) 易或問三首「或者曰、然則何以知非聖人之作也。曰、大儒君子之於學也、理達而已矣。中人已下、指其迹、提其耳而譬之、猶有惑焉者。溺於習聞之久、曲學之士喜爲奇說以取勝也。何謂子曰者。講師之言也、吾嘗以譬學者矣。元者善之長、亨者嘉之會、利者義之和、貞者事之幹、此所謂文言也。方魯穆姜之道此言也、在襄公之九年、後十有五年而孔子生。左氏之傳春秋也、固多浮誕之辭、然其用心、亦必欲其書之信後世也。使左氏知文言爲孔子作也、必不以追附穆姜之說而疑後世、蓋左氏者、不意

歐陽脩の易學思想の形成

後世以文言爲孔子作也。孟子曰、盡信書不如無書。孟子豈好非六經者、黜其雜亂之說、所以尊經」。

- (8) 傳易圖序「昔孔子門人追記其言作論語、書其首必以子曰者、所以別夫子與弟子之言。又其言非一事、其事非一時、文聯屬而言難次第、故每更一事必書子曰以起之。若文言者、夫子自作、不應自稱子曰」。
- (9) 『易童子問』卷一「童子曰、然則乾無四德、而文言非聖人書乎。曰、是魯穆姜之言也、在襄公之九年」。
- (10) 易或問三首「十翼之說、不知起於何人」。
- (11) 長文であるため全文は引かない。『易童子問』卷三「童子曰、敢問其略」の問答を参照のこと。
- (12) 易或問「或問曰、今之所謂繫辭者、果非聖人之書乎。曰、是講師之傳、謂之大傳、其源蓋出於孔子、而相傳於易師也。其來也遠、其傳也多、其間轉失而增加者、不足怪也。故有聖人之言焉、有非聖人之言焉」。
- (13) 易或問三首「或問、大衍、筮占之事也、其於筮占之說、無所非乎。曰、其法是也、其言非也」。
- (14) 王安石は、「如歐陽修文章於今誠爲卓越、然不知經、不識義理、非周禮、毀繫辭、中間學士爲其所誤幾至大壞」（『續資治通鑑長編』卷二二一）と非難する。
- (15) 『北牕彙編』卷上「歐公語易、以爲文言・大繫皆非孔子所作、乃當時易師爲之耳。魏公心知其非、然未嘗與辯、但對歐公終身不言易」。
- (16) 注（5）朱前掲譯書、八二頁。
- (17) 『宋史』歐陽脩傳「歐陽脩、字永叔、廬陵人。四歲而孤、母鄭、守節自誓、親誨之學、家貧、至以荻畫地學書。幼敏悟過人、讀書輒成誦」。
- (18) 同丁判官書（『歐陽文忠公集』卷六七・『居士外集』卷一七）「如修之愚、少無師傳、而學出己見」。
- (19) 答祖擇之書（『歐陽文忠公集』卷六八・『居士外集』卷一八）「夫世無

師矣、學者當師經」。

- (20) 歐陽脩は、今傳わっている『易』を完本だとはみなしていなかった。傳易圖序に「說者言當秦焚書時易以下筮得獨不焚。其後漢興、他書雖出、皆多殘缺、而易經以故獨完。然如經解所引、考於今易亡之、豈今易亦有亡者邪、是亦不得爲完書也」と、『禮記』經解に現行本にはない『易』の文を引くことをその例證とする。また、『易童子問』卷一の冒頭の問答にも「易之闕文多矣」とある。

- (21) 「易或問三首」には、「孟子曰、盡信書不如無書。孟子豈好非六經者、黜其雜亂之說、所以尊經」とある。

- (22) 『宋史』儒林列傳一「王昭素、開封酸棗人。少篤學不仕、有至行、爲鄉里所稱。常聚徒教授以自給。李穆與弟肅及李惲皆常師事焉。……開寶中、穆薦之朝、詔召赴闕、見於便殿、時年七十七、精神不衰。太祖問曰、何以不求仕進、致相見之晚。對曰、臣草野蠢愚、無以裨聖化。賜坐、令講易乾卦、召宰相薛居正等觀之、至飛龍在天、上曰、此書豈可令常人見。昭素對曰、此書非聖人出不能合其象。因訪以民間事、昭素所言誠實無隱、上嘉之。以衰老求歸鄉里、拜國子博士致仕」。

- (23) 『厚齋易學』附錄一・先儒著述上「正義補闕。崇文總目、周易正義補闕七卷、不著撰人名氏。自謂補遺之闕。蓋出於近世云」。

- (24) 『玉海』卷三六「胡旦有易演聖通論十六卷、多引注疏及王昭素論爲之商榷」。

- (25) 『郡齋讀書志』卷一・證隱簡一卷「皇朝天禧中毗陵從事建溪範諤昌撰」。

- (26) 『漢上易傳卦圖』「右河圖、劉牧傳於范諤昌、諤昌傳於許堅、堅傳於李溉、溉傳於种放、放傳於希夷陳搏」。なお『宋史』朱震傳には「放以河圖・洛書傳李溉、溉傳許堅、許堅傳范諤昌、諤昌傳劉牧」とあり、やや異なる。

- (27) 『漢上周易叢說』「諤昌以乾象釋元亨利貞、文言又從而釋之、疑其重複、

謂非孔子之言、且引穆姜之言證之」。

- (28) さらに遡れば、『經典釋文』に「梁武帝云、文言是文王所制」と、梁の武帝が文言傳を文王が作ったものだと主張していた。

- (29) 『歐陽文忠公集』の「易或問三首」と「易或問」に對する注記に「景祐四年」とある。

- (30) 戸田氏は、繫辭傳に見える「繫辭」を、繫辭傳を指すのではなく、爻辭を繫ぐことだとする解釋が、范諤昌と歐陽脩とで一致することから、歐陽脩は范諤昌の説をもとづいたのではないかと推論する(注(4) 戸田前掲書の追記)。しかし、その解釋はすでに『周易正義』に示されているので、范諤昌の創見とは言えず、おそらくはともに『周易正義』に依據したのだと思われる。

- (31) 姜海軍は、歐陽脩が王昭素・范諤昌の説を繼承した可能性を指摘している。姜海軍『宋代易學思想研究』(人民出版社、二〇二二年)四五頁。

- (32) 歐陽脩の古文の影響については、東英壽『歐陽脩古文研究』(汲古書院、二〇〇三年)中篇「歐陽脩の古文」を参照。

- (33) 『宋史』尹洙傳「至宋初、柳開始爲古文、洙與穆脩復振起之。其爲文簡而有法」。

- (34) 『歐陽文忠公集』卷七三・「居士外集」卷二三・論尹師魯墓誌「述其文、則曰簡而有法。此一句、在孔子六經惟春秋可當之、其他經非孔子自作文章、故雖有法而不簡也」。

- (35) 東氏の研究(注(32) 東前掲書、中篇第二章第一節「三經書研究」)によれば、景祐四年に著した經書に關する論考は、その年に作成された文章の半數を超える十篇で、『春秋』『易』『書』の三種類に及んでいた。

- (36) 東英壽「歐陽脩の夷陵貶謫と古文復興運動」、『中國文學論集』第一六號、一九八七年、九二頁。

- (37) 『崇文總目敘釋』(『歐陽文忠公集』卷一二四)の易類序には「自伏羲

畫卦、下更三代、別爲三易」とある。しかし、歐陽脩が實際にそのように考えていたとは限らない。『崇文總目』は官撰である以上、私的な見解を差しはさむわけにはいかず、一般的に支持されている説に依據する必要があったはずである。土田氏が、『易童子問』、『易或問』(『居士集』一八、『居士外集』一〇)、『傳易圖序』(『居士外集』一五)、『試筆』繫辭に見える彼の有名な十翼批判が朝廷の名のものと(『崇文總目敘釋』易類では觸れられていないのも、年齢による學說の變化も大いに考えられるが、立場を考慮した可能性も無いとは言えない)(注(6) 土田前掲書、四六頁)と指摘することも参考になる。筆者は、『崇文總目敘釋』に十翼批判が見えないのは、後者の、立場を考慮したためだと考える。

(38) 緯書については、拙稿「緯書の成立時期について」(『東洋古典學研究』第三九號、二〇一五年)を参照のこと。

(39) 『歐陽文忠公集』一二・奏議卷一六「論刪去九經正義中識緯劄子」を参照。

(40) 『周易正義』卷第一「第四卦辭爻辭誰作」を参照。

(41) 易或問「其曰易之興也、其於中古乎。作易者其有憂患乎、其文王與紂之事歟。殷之末世周之盛德歟。若此者、聖人之言也」。

(42) 歐陽脩が『易』において人事を重視していたことは、注(5) 朱前掲譯書、第二卷第三編第六章第二說二(一) 六十四卦、皆、人事を言ふで詳しく論じられている。

ただ、『易或問』に「爻辭は占辭である」とする言葉も見られる。聖人の作のうち、卦辭・彖傳・象傳は、一卦の義を總論し、中人以上のために設けられた言葉、爻辭は、吉凶を人に告げ、中人以下のために設けられたとする。文王が、卦爻にこの世の道理を示した言葉を託して『易』を作り、後世に占筮に使われるようになったとする史觀と、爻辭は占辭であるとする認識を、どのように折り合いをつけていたのかは不

明である。だが、『易』の占筮の屬性を一段と低く見積もっていたことは確かである。

(43) 『易童子問』卷三「說卦・雜卦者、筮人之占書也」。

(44) 『漢書』儒林傳「費直字長翁、東萊人也。治易爲郎、至單父令。長於卦筮、亡章句、徒以彖象系辭十篇文言解說上下經」。

(45) 崇文總目敘釋・易類(『歐陽文忠公集』卷二二四)「凡以象・象・文言雜入卦中者、自費氏始。田何之學、施・孟・梁丘之徒最盛。費氏初微、止傳民間。至後漢時、陳元・鄭衆・康成之徒皆學費氏、費氏興而田學遂息、古十二篇之易遂亡其本。及王弼爲注、亦用卦象相雜之經」。ここでは「古十二篇の『易』遂に其の本を亡ぼす」と、『傳易圖序』とは異なり、事實を述べるだけで良し悪しは示さない形で記載されている。『崇文總目』が官撰であるために語勢を弱めたのであろう。

(46) 『漢書』藝文志に「易經十二篇。施・孟・梁丘三家」とあり、その顏師古注に「上下經及十翼、故十二篇」とある。「十二篇」とは、『易』の上經・下經二篇と十翼を合わせた篇數だとされる。そのことから、『易』の經・傳は古くは別行していたとされる。實際、馬王堆漢墓から出土した帛書『周易』は經と傳が分かれて書寫され、梁丘氏本を底本とする熹平石經『周易』は經と傳を別にして彫られていた。熹平石經『周易』が梁丘氏本を底本とすることについては、徐芹庭『漢易闡微上』(中國書店、二〇一〇年)第六章「《梁丘易》與漢熹平《周易》石經」を参照のこと。なお虞萬里編著『二十世紀七朝石經專論』(上海辭書出版社、二〇一八年)は、熹平石經『周易』に關するこれまでの論考が集録し簡便である。

(47) 『三國志』魏書・高貴鄉公髦「帝又問曰、孔子作象・象、鄭玄作法、雖聖賢不同、其所釋經義一也。今象・象不與經文相連、而注連之、何也。俊對曰、鄭玄合家・象于經者、欲使學者尋省易了也。帝曰、若鄭玄合之、

於學誠便、則孔子易爲不合以了學者乎。俊對曰、孔子恐其與文王相亂、是以不合、此聖人以不合爲謙。帝曰、若聖人以不合爲謙、則鄭玄何獨不謙邪。俊對曰、古義弘深、聖問奧遠、非臣所能詳盡」。

- (48) 『景迂生集』卷一八・題古周易後に「先儒謂費直專以象象文言參解易爻、以象象文言雜入卦中者、自費氏始。其初費氏不列學官、唯行民間、至漢末、陳元鄭康成之徒、皆學費氏古十二篇之易、遂亡」とある。この先儒の言は、『崇文總目』の易類序にほぼ同文が見られることから、ここから引用したと考えられる。つまり、「先儒」とは歐陽脩のことである。

- (49) 『朱子語類』易三・綱領下・論後世易象「歐陽公所以疑十翼非孔子所作者、他童子問中說道、……又疑後面有許多子曰。既言子曰、則非聖人自作。這箇自是它曉那前面道理不得了、卻只去這上面疑。他所謂子曰者、往往是弟子後來旋添入、亦不可知」。

- (50) 歐陽脩の「用九」「用六」の解釋は、『易童子問』卷一・「乾曰用九、坤曰用六、何謂也」の問答および「明用」を参照のこと。

- (51) 『朱子語類』易四・乾上「歐公文字尋常往往不以經旨取之、至於說用九・用六、自來卻未曾有人說得如此。他初非理會象數者、而此論最得之」。